



守りしうらると云れは... 大船... 可也

山内親作の時代の事

人王五十六代 醍醐 宇多天皇... 藤原... 大臣

人王五十七代 朱雀 醍醐... 天皇... 在位十

村上

のこ代... 相... 朱雀... 天皇... 在位

と云ふ。又延衣の巾より西より来たるもの云ふは源氏乃
姓成ありあり一カあり今源氏の名は此の例に
可なりわたり

源氏五十四帖之義乃名之事

九十四帖の中之名は四のふり一は二のふり
二は三のふり三は四のふり四は五のふり
五は六のふり六は七のふり七は八のふり
八は九のふり九は十のふり十は十一のふり
十一は十二のふり十二は十三のふり十三は十四のふり

佛經より七種の題号より學三徳三具足色人法喻
也人の善除經善賢經之類法ハ楞伽經之類喻ハ金剛經
之類也人ト喻ハ如来獅子吼經之類法ト喻ハ妙法華
經之類ハ具足ハ大方廣佛華嚴經之類ハ是人法喻

具足ト云

惣別天台者十美と云ふは一は天台の
中諦の法門より了はる門よりは空門よりハ亦有
亦空門四ハハ亦有亦空門ハ是は亦空佛性中の三諦
よりる門ハ空諦ハハ則空門佛諦より有門東道より
亦有亦空門ハ有亦空門の二と云ふ一切の言教ハ
ハ四諦とのれと云ふは一は故四諦外別立不性
と云ふなり 云々 天台者十美ハ法華經より付く
三大部の諸君なり云々十美ハ天台作 文句十美 天台作
摩訶訶觀十美 云々 云々 妙法華經の末疏より

釈籤十美 妙義尺書 疏記十美 妙義尺書 弘安十美 妙義尺書

妙義尺書也本疏末疏凡合て凡六千美と云かり
会多中末の法華此有部と凡一文句中末の
經の文々句々と凡一止観中末の法華此大意と
天百りと云れし法華と稱する所の釈迦一代權教
と云うく何は一四教の時の始末にわたるなり
されは法門わたりれし一これに大部の内より
二條の法門より其中に摩訶止観十境十
二條と声聞緣覺の二部し其声聞の爲に世諦
の法門と云ふこれより世諦と改りして寂滅

の法よりつらうし四門と云ふなり

世集滅道 世集滅道 四諦の法門と云ふ一は苦諦の境にして釈身此苦果

の係力に何のりて観するも二は集諦境は
は釈身之去の世よりなり業因と作するなり
三は行れりて観するは二と世間と因果
と云ふし世間の世の力の上の因果の事
三は道諦の境は世間の因果と云ふ道
流傳の因果縁といふはすてか世を漏る
道に入りと云わり四は滅諦の境は道諦の境
行より三界は煩惱と断り法性の空なり

るべし一門と云ふも多岐にまかすなり
不問云々としてさき此道は同一のなり
とて四門觀別見直諱同て是と云ふ

空船中の三諦の半 天竺の一心三觀として而
の法門と河法なり万法は空と觀しれ、船中の
空は端了と云ふ又佛法と佛諦歷然と云ふ
空の中は佛觀よ、あまなりといふ空船二カ、これ
中道觀のあり空船の二觀ともなりと云ふと三
諦一諦非三抵一の因縁の三觀と云ふなりは三觀行
者の一心よりなりて觀しと云ふ天竺の一心三觀と云
ふは四諦と三諦とありはるも有るは則空船なり

わづせり物や十界三千の諸法一切の法門は空
船中の三諦と云ふなりと云ふ一家同義言法界は
有須云十界即空船中 三諦ノ事ハ一方ニアケル心ハ
有心也アリ三有ト云心ハ 界ハ性也十界ハ界ニ非ス

亦有亦空 一花開五葉殊泉自然成
有門空門 柳絲花紅當伴

日本記 三十卷 續日本記 三十卷 日本後記 四十卷 續日本記 三十卷
文德實錄 十卷 三代實錄 五十卷 清和陽成天皇御記 宇多
國史書之

紫式部系尚

并引統

紫式部倍姓

良門

大藏冠六位源前院左大臣冬嗣公六男也
贈左大臣正一位耳露寺元祖也

利基

贈正一位

兼輔

中納言

惟正

刑部大輔兼後守從之下

高藤

少左衛門下

兼茂

提中納言

女子

後藤作左

為時

哥人

惟親

為時

越前守

女子

母常陸介攝津守藤原為信女皇子也皇子也
上東門院女房号紫式部傳内助作左

源氏物語や春

休聞卷之一

は物詔書徳恩
之女事や
仁保十皇女淨刹
皇生と稱引つる
之皇味段食有熱飽定
云々云々

は物詔のむらり後々あてりるも西宮左大臣安和

二年太宰権師と方近也しむいしり有武

かえれくもわかれをわけて思ひかけとさるは

大赤院 選子内親王 村上女十宮 上東門院へりりりり

あま子や竹うとさるひりりりりりりりりりり

竹さりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

はらわちりりりりりりりりりりりりりりりりりり

石山と通和しるあまのあまのあまのあまのあまの

七月十六日の月棚水より流れてあまのあまの

わらわらりりりりりりりりりりりりりりりりりり

言上叙之号日本記御房 衣鳥

紫式部藤原時女也 或見河海極
衣鳥全情等

作者

大新院 選子封上
女十卷 所望上東門院 一乘院后宮
御堂殿女 之時或於

作進 連々用意并請石山寺得趣向之由見

河海極但魏般若書之說云實之大意者君

臣父子夫婦朋友之道以教人也關雎之德可

見又模莊子寓言更有一字應曉九明盛者必

衰會者定壽之理而已或說云一部作意比天台

世教法門

時代實弘初造出之策和流布特止條三之令極
是門之比實既 從實弘到文明十年四百八十年也

諸本不同羣春中昏清昏有差字不可 看表

身河舟流西本也俊成卿父子本獨有異

可了簡之是号詮篇以光源氏事為詮故号

源氏之姓始干嵯峨御子信云源字者監解小

水為九河之源之義祝而用也以物語亦全其理

仍累世握既不絕也又水源極有口史一說

准批

桐壺御門准醍醐天皇以下見河海抄實聖代之

いふれ乃其時より 此矣端詞は甚深なりて教

多の女とすくめり先作夫とわたりて

やうらふ事とすむとささる物より母は

のわらしそ越えしより作夫ありしれ

人の難いかしらるるかこしはよ

まもあふんかかりりさのりりり

音りのいれにたささゆらう

停場集初の詞同之意通

一乃深意あり秘説也

延喜の所記

世なりい 女乃を位以上至二位三位也

礼記中夫の身義等云

古者夫の位立は官三

人九嬪二十七婦八士

御書以獲天下之治

以明堂婦順故天子

和布衣理天子立

三台九卿二十七

大吏八十一元士以獲

天下之治治以明堂

而國治故曰天子

男教居聽女順

夫子理得禮道

治治後

官乃名なり 女乃位の記 更衣の女乃位

女乃位の記 更衣の女乃位

上篇乃位の記 更衣の女乃位

中篇乃位の記 更衣の女乃位

下篇乃位の記 更衣の女乃位

無停事

は二所の女乃位の中より三品乃位性をわ

くそりしれはまかりありたり

女乃位より人なりしれ

中篇乃位より大幼女の女乃位の

より下篇の更衣の女乃位の

徳とよむと云ふなり細流
 ともくありのあり
 かのりてしん
 りのりもらんわらわはらんかきりたるの根
 わりともはは氏の爪母をこし 和云何云爪定
 秋の書司よまきしして爪のわきまのりよ
 鐘水のありまよかきんさきとわれいふよ
 かんてらるるはらんそてゆきりさきし水屋抄の
 けよ父よとられてらわい使りまよわて上官を
 こつらかりのみこらんかきりさきとてせめがけし
 かん事かりて
 えんろらん 丁を内作たりとの物りかきんは
 丁のりらんをわはらんそて花
 上丁のりまきりて 上筋しよはし知

らわたりく 吾別 日本記 吾破 日本記
 らんそて 纏く
 まのりも 氣進 日本記 赤尾 万 馳上 日本記
 かつのりも 夜者守夜昼可撃 長根寄
 らんそて 去る坊 朱の爪母女の心
 らんそて 不用 不能ありてしん 細不善 何
 らんそて 朱の爪母の爪母子らんを 朱羅一
 前新院 碑
 いまよのりん 諫之ねきんてしん
 けりもあしけ 爪門乃爪けく 恐何とて
 碑 可恐之神 恐惶 日本記 恐海 恐山 万
 万葉方なる底のけりてしん 完手りてしん 万月

雜子云吉之人吾天
休吉不吹毛求疵

一乃こし 上河

吹毛求疵 漢文 何云所好則鑽皮出

具毛羽所惡則洗垢其之般痕 好生毛羽惡生之疵 大行路

かつひの本よまらねむらねとあつかりのと色と吹とと

とつふりまらねむら

まらぬハクウウウウ ぬさるるる力カカカカカカ

ぬさるるる ぬさるるるし何母本 ぬさるるる上起下文子結并生格

うわつが 後凉殿の良也其間と殿々満々

淑宗舎と相意て云立舎の一カり 藤景殿宣耀

敵カと之れてまらつがハクウウウウ

うらんーまらまら 後凉殿のまらつがハクウウウ

こハ村上ハ町宣耀殿の女流 親子中陰をたんハ女と有産

の中云 皇子九降右大臣 師輔女 爪物控のわりーまらぬハ方

くのくーうーうーこの道と不淨とまらまら

まらまらと云花 云正路也 和巴

えささーぬ 敵早托 工吉 伊左の親 空河

うささーり 廻節乃まら

まらまら 後凉殿ハ水殿乃西まらぬハな

まらまら 此ハ常の爪まらまらと云花

まらまら 常司

まらまら 皇子三止と着袴之例 冷泉院 天曆

まらまら 七月亦三日 田融院 天和九年八月十六日 花山院 天曆九年十二月

まらまら 東宮マ時 親王時

まらまら 一修院 拾遺 天曆永時内衣と云平親まらまらと云花

まらまら

月事就卦考吟卷
押卦吟馬故女道
路可馬道 涼夏并利

あつての事をも そくわ初定乃水初なる
かろつてしる 勅旨の初し

行丁の月の日

いーのうま 信成と文成の形見はくま

まぐさのうま 名取ゆと禁中よさるふ病吹し

つふの田よと水初いさるの事し花

初のかりん 初方いさるてわわてとるれと病の

初のかりん 事さるるる 今よとととととと

百卷 百官の弁所お形 禁中は百卷とと何

あつての事をも 初れまえまうととととと

の母の初し 初方いさるてととととと

うまはの月よととととととととととと

くれまうふん乃やと初方人のまのふかやとらひ

あつての事をも 文成のふとととととと

かひふのふととと 類題 河

人をかきととと 早下かり

あつての事をも 人のりひととととととと

のふとととととと 葉原経九

うまはの月よととととととととととと

人のふとととととと 水門のふふのゆし事ととと

あつての事をも 林半の位とととととと何

りよりのふととと 田の半ととととととと

あつての事をも 毎方田ととととととととと

つたか

えしのわやとく くらまのわや

いそゆかち 船よさうふ男世しよやの上人

こまかり細 母衣の母乃服とて里よゆき

比能酬小門より七帝此小文ありきり此と

更衣の母をわきり 六月白くぬれり 柳氏

常衣とさくより此のよひ

りうやと くらまの細

小さく 常きく

小くわけ くらまのむね

くらまのむね くらまのむね

くらまのむね 寂宴 和名河さひく細

くらまのむね 更衣の母のよりさくむね

神代巻 結髪 読

河海云四代 天来利重十身 六月丁卯弟女 始髪結

りうやと 新護 和名河 くらまのむね

すりく 早速也 くらまのむね

女ほく 母竹八人ぬらん

亭子院 長恨の点 みらんのちよ

くらまのむね 神のむね

くらまのむね くらまのむね

くらまのむね くらまのむね

くらまのむね くらまのむね

くらまのむね くらまのむね

くらまのむね くらまのむね

くらまのむね くらまのむね

くらまのむね くらまのむね

くらまのむね くらまのむね

くらまのむね くらまのむね

くらまのむね くらまのむね

くらまのむね くらまのむね

くらまのむね くらまのむね

くらまのむね くらまのむね

大液芙蓉若央柳
芙蓉若面柳如眉
對此如何不淚垂

筆をみわかれ、心解くくわてんて
つめいそろ 唐てんて楊貴妃の伝くせぬ

うわりのうわさ 実子らんり 細

カク 假借 自飲政要 細

らうまわち 芳良直亮 日本紀何やあ。て

花名のあても 青表紙の下の女帝衣の接子

のこまんと略して花名のあてもさるもさるり

河はくしをさるてすまふ心貴妃と

芙蓉ふみくはらけりま心と文衣の

半ば思くは花もさるもさる方

と芙蓉柳てたてはかたけりさる

花をれみはもさるもさるわらわ

すまふ

弘徽殿の さまそん門の南は西つま

わらひをさる さまそんの由あり

かきさる さまそん 弘徽殿の

さありいとさる

かきさる 弘徽殿の由事くさるあむ

月とつらぬ 大矢利日以應自月落長安

半夜鏡 神の 文神相影を

色あをさる 河を ちの河くさるは

さるは 弘徽殿 長恨歌

夕殿堂七七思恒然

右近れはくさ 夫一刻^九右近夜行良人初奏
時後子刻也一刻右近宿直しり玉卯一
刻内堂更一刻奏宿直

ちのわく 法皇御より 一方小書戸を
あけぬ 河原
つらもたして 川 玉簾のりしとてけしり
さるしとて 思ふもさる

か紙^{更衣細}あさつり 春宵若姫日高起從此若王
不早朝 長恨奇

あさくれわ 朝餉問 二問也 諸神侍養わこ

物くれわの大飢下の上の東殿の殿西神々夫と
一貝の来女不次物の侍御し私何女女方の
候膳し女房不候の可い否 或四侍侍凡為侍

朕例之 何云朝餉問二問也於此処朝餉
供之南平敷二枚^上 東小立納屏風夜御殿
方制障子御屏風外案亦調度 信膳上臈
女房^{典侍或徳色人} 候朝餉南向端中臈^{典侍或徳色人} 障子^{上臈}
の外ありてさるわたり下臈次も子侍之

大とさード 大衆あはさるるのうさる
朕はさるわたりわたりわたりわたりわたりわたり
のれ 何云号登御膳大床子御膳上右八朝
供之近代一度也皆ハ至上食那之代来不熱左
波とさるわたりわたりわたりわたりわたりわたり
さるわたりわたりわたりわたりわたりわたりわたり
しんさる 女房の候膳
かしの 御膳 夕モノトヨム かしめハ信御乃惣名 稱

人い廿ん 俣膳藏人頭以下四位從侍臣役送四位立

位古位時より後して二十人の考あり

よの爪半よの爪よりぬらる 余の事ハ正務カ也しころ

よの爪

く可申れ事より世上のまうわに力カもがさか

あふらんしあふらんしとさくすくすくすくすく

えくすく 断字果 立奇相道退き同志あり

いふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

月日つく ともたふらぬ忌の口わくんんん

いふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

御代東宮文彦太子保明堯一とね其子御代

王立坊又早世其後朱彦院立坊也 果 山脈

坊えかりしよりさるる辞して先坊より一柳光

六條光見おのりしと朱彦院とていふふふふふ

いふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

位よりれたり

くまわらにれりまれり 光若ハ寂れりまれり

とくわらにれりまれりまれりまれりまれりまれり

せんし 果 人のていふふふふふふふふふふふ

ねるふふふふふふふふふふふふふふふふふ

私云禮記云二名不傳譯 果 孔子母在言

在不稱言傳不稱在矣唯之言傳則不稱人也

よの爪よの爪の文字とれりといふふ

かたもあにやら力　とて人の心安堵す細

かたもあにやら力　何云か人に細母と云ふもしつゝの事せ

るて　源守之母のりやあゝの事よゆをりし

いままのりやあゝのりやあゝいづく事よゆをりし

ふひわそのりやあゝのりやあゝいづく事よゆをりし

かしの世のりやあゝのりやあゝいづく事よゆをりし

かしてやうし我のりやあゝのりやあゝいづく事よゆをりし

かしてやうし我のりやあゝのりやあゝいづく事よゆをりし

七よ如くつ　私云何云皇子七歳御存始例村上天皇

十二月八月親王時　御存始例村上天皇

自觀政安とりくくりぬく皇子太子親王等のみ

かたもあにやら力　とて人の心安堵す

かたもあにやら力　賀茂宗茂　一兵衛細

かたもあにやら力　嬌　寂媚

うらまきあわらひさ　しつゝの事よゆをりし

かたもあにやら力　とて人の心安堵す

かたもあにやら力　とて人の心安堵す

かたもあにやら力　とて人の心安堵す

かたもあにやら力　とて人の心安堵す

かたもあにやら力　とて人の心安堵す

かたもあにやら力　とて人の心安堵す

かたもあにやら力　とて人の心安堵す

方は若相わがかりしく、猶然よがのしむるや
—とつりこまゝ人のくわ集まらざるやと
人いさうきさうれうきさうきさうきさうき
相おぼろけり

國乃親 此門と國母と申し合條大上をたす

号と之なることり花 花の極如何 言を介
りしり國のむきかてわらわらわらわらわら

帝王乃りてかりさうわ 帝中よりわらわら
朱羅在りてまうりて世のさうれうれうれ

又次慶のうらりひかきさの事わらわら
かかきさのうらり 攝政閑白乃天の極依り

とてさうれうれわらわら 徳政閑白乃天の極依り
ありとてわらわらわらわらわらわらわらわら

まかり花

又その相さうふ 大やけのうらりわらわら
うらりうらり事の相さうふとてわらわらわら

津楚王太子誕生の時河松多仙人奉相之儀わ
似るる事

弁といまゝさうりさうら 大太弁もわらわら
文字可清之由一禪御後とてわらわら

馬りて声とていし一のわらわらわらわら
とのさうらとさうらとさうら 細流柱俊子可

人名 和云何云天年二年始置文章博士
漢晉云明於古今温故知新經之博也

久りわらわらわら 子藤久らわらわら
いしりさうらわらわら 藤久のわらわら

玉衣のわらわらわら ことり人の又てさうら
朱の相又わらわら

の門下は了らるる云 雲霧有輝かりは先

帝為代ま方の帝打りり

三代乃らるる人 こと名なくはるるを云ふ云

ささいのるる 先帝の依る有はりの母依り云

いしし 忘いしし云

すくくともも 速字しはくく云

爪せしこの名も 有はりの母依りし云

あつしきまがかりるる 桐葉ま有はりの母依り云

るるるる 受張諾

あつしきまがかりるる 不定かりるるの母依り云

いれく 母依りの母依り 吾越 皇入

うちあかりい 女房より此あかりいなる中よ有

母の母あかりい 母の母あかりい云

かたかたあかりい 二の母あかりいとかりい云

らんらんあかりい 既近

かたかたあかりい 新撰万葉よあり

らんらんあかりい 吾越

らんらんあかりい 吾越

らんらんあかりい 吾越

らんらんあかりい 吾越

らんらんあかりい 吾越

らんらんあかりい 吾越

らんらんあかりい 吾越

らんらんあかりい 吾越

らんらんあかりい 吾越

らんらんあかりい 吾越

らんらんあかりい 吾越

不審而出し母依りたる母の母依り
らんらんあかりい 吾越

所収撒しん大御子二脚とてそいふなりは後氏の
丸服より殿上の御侍とていふなりは今もその
物名の時に六位死入二人の先は御侍ははうとて
これとてなる事なりと云 侍子に主上の御侍と
いひけりふりあり

わりのまじりありの御侍 清涼殿東庇なり
清涼殿より向方なり何れは半何れは妻

くまの御侍 冠者也丸服丁少の御侍 和親御

わりの御侍 親の御侍 引合は冠
の人の名なり

死入にて 死入 執儀なりとて下なりとて案
いふにそのなりなりなりなりなりなりなりなり

わりの御侍 死入 死入の御侍 死入 死入の御侍 死入

の御侍 兼保二年八月御記 下竹東ノ中ノ御侍

立屏風具申敷上鋪二枚圓一敷 異月 為親王
擣衣処 今案 一世源氏丸服も下竹とて

体ありん 西宮御子 とてなり花

丸服の好い源氏の死入を位人 丸服 合云各位ハ

是も袍也 西宮御子 是も袍也 是も袍也 丸服の好

とて縫服の是も 是も袍也 可なり 但延喜縫殿寮

丸服の好い源氏の死入を位人

之例也殿上六向也神佛門東三向西三向也
のひきまうさ 皇氏の御し海のまうくまうさ
しり 船所しり

日竹宣旨 西宮おまうりまうくれば蓋内加
上しそんそ引入たんとそんあまをたれて蓋
と所花

うの氣婦 丹余婦丹余婦まうくま丹余まはま
まは内氣婦まはれとうの氣婦まはま
おの比下命し 兼 水緑たそ余婦まはま丹竹人
物ま

まうらまの御し 御の衣の事しりまはま大わわ
小御のましりかかそそまはまわくまはま
兼大御のまはまのうまはまら物まはま
かまま大御のまはまわらしり衣の事し 小御

新し大御で移そ衣そ矢削のぬし衣まはま
かまそそそ不意しとらわらひの縁しちては衣
日ぬ裁縫いさうりおむかまの装束まはま
しそ共れ用そ衣そ知まらまのりまはま
ののこまうらまのこれまの力装束そ
まはまの表そまのうま唐衣の代まはま
まはまのまはま入内御まはま
いそまのまはま 水門のまはまかまの
うらまはまのまはま ともまはま
いそまのまはま 衣しちまはま
まはまのまはまのまはまのまはま
のまはまのまはまのまはまのまはま
何云別ま 兼まはまのまはまのまはま

箒よりぬるるはこゆまふ人折横と置るる也

親と元服の時水袖ゆら花れ委 何云皆歎

也或は簞物西宮記云木物枝物 興菓子也

てりれはうらうらとて本物或は打色ははらう

こぬりて 簞物 紙のふもろ

えんしとらうのうらう 屯食はも飯を物

何屯食は元服の人の 法陣の役を

これとらうらう物 えんしとらうの紙

撫てよして 紙の半し

ハ親と元服の時 紙の半し

去るの紙 紙の半し

ゆいしとらうのうらう 紙の半し

女系 紙の半し

あがらう 紙の半し

花人がわ 紙の半し

四系 紙の半し

丸わら 紙の半し

か 紙の半し

か 紙の半し

二 紙の半し

の 紙の半し

中 紙の半し

概がれはは一尺の半よりわけてゆへ一花
かすれよあたる有量の亦舞工のよとせうらこ
いれあうとく

あめあめあめと 有は行のめとて

二三言 少門のさうこし一老

かすれく 念ひく細 名物流よりあめ
りつてく 勢 娘 日 けうりかからる一花

志をうた 満景会 相意して源氏に居てえま
うさくさうわつや大哀の民よりわ 曹子よこ
えんし細 巫序の内哀よりあわ 曹子よこ
こらりし 源氏の巫序の相意

こまのめい 二條院の巫序の相意
十のめのあめ 二條院の巫序の相意
せうせうのめい 二條院の巫序の相意

ゆくりさわかひくわさうとでうん（法皇）二條院
まらもまの二條院で号するは正徳二年上法皇
て名とくしけくさく 源氏のみさそ二條院
かすれく 二條院の巫序の相意
ねよ二條院の巫序の相意

丁わさく 家力を恢復丁わ後し作事この
や行し善匠の事と可わく 河内本よめ
丁わさく 二條院の巫序の相意

ゆかり 毎二さくひかさん（和）
いさのみ 樓額題鶴鶴池心浴入（白氏文集）

あわさく 二のめいさく
かすれく 二のめいさく
かすれく 二のめいさく

かみの厚れ... 了ぬり... 惟光の女内侍... 又の... 申の... 下り... 下... 何不下... かなあくの

かまの内の

北条政元 天下の政

... 二位三位... 任... 議... 北条政元

春海久

よりの根り 根平様様なり
家のうらや 町のうらの敷しりよの根り一石

しふうき 者味やねんし不放埒し
うらやうらやわらわて ちわつりの事柄の敷し

丁くくあつてーと 中二所深氏の約し家の

うらやうらや半もろからり半一もろく
初本の家のこのよらんねんうらや 昌鏡

ちやんのいんし ぼろあねねのわらわら
中々の約りねんぼろあねねのわらわら

そよのあ 了ぬり約し 中二所の敷し 昇三所敷し

うらやうら 町まわらわし
うらやうらのりてー ぶらりあつて

があらえ 何うてろろからりあつて

うらやうらてー くらりてー ちやんし

くらりてー くらりてー くらりてー

かふうーとよふ 了ぬり約し 中二所の敷し

とよこねわらわらうらやうらてー

くらりてー くらりてー くらりてー

くらりてー くらりてー くらりてー

くらりてー くらりてー くらりてー

くらりてー くらりてー くらりてー

くらりてー くらりてー くらりてー

かりをんま世のしらさ名を花う表る人
 のまきりさうに 養上敷し
 あまののりい けいこ 種時かきくうい
 あまのまきりい 事かきくうい
 とらちのかりあ
 のりめらうんド みる様かきくうい
 いりい
 うのかりいけい 世のうい情いつまん
 えんかりのしらして せんかきくうい
 かりいさく 艶字し 夕白上敷く
 ういりあつさ事い みるさかきくうい
 ういりあつさ事い みるさかきくうい
 かりいさく 艶字し 夕白上敷く
 かりいさく 艶字し 夕白上敷く

ういりあつさ事い みるさかきくうい

海濱 海頭 伴勢物語真名本 海頭

かりいさく 艶字し 夕白上敷く
 かりいさく 艶字し 夕白上敷く
 かりいさく 艶字し 夕白上敷く
 かりいさく 艶字し 夕白上敷く

かりいさく 艶字し 夕白上敷く
 かりいさく 艶字し 夕白上敷く
 かりいさく 艶字し 夕白上敷く

古語達也 古語達也 古語達也
 古語達也 古語達也 古語達也

か

うのしりめの事し 了願する事の事し
法の時の 見花多 法華三周縁を 源氏に世は
まづありらるる事とてさういふに世は
よはあたまをせりやたりは 特くし事し
んきいさききりし
ふひーはは世のこころいかりんし
しりんこい ちよりうらわはらふのこころをちん
かひりかりし事し
くねかりん けりし事し
わらわら ちりめねらねら
かりいし ちりめねらねら
とられらるしりり かのこころいかりん

すうらうらうら ちりめねらねら
さうらうらうら ちりめねらねら
うらうらうら ちりめねらねら
いさききりし 外人不見々應笑 白雲集
いさききりし 物娘の事し
かだまきりし 愛別でんをいり人あつた
んかきりし 信の事し
ねらうらうら 今おはらるる事し
ちりめねら 言殺
ねらうらうら 了願の根柢にさういふ事し
ねらうらうら ねらうらうら

事とて之を以てつらき花又懼しむるは
今一と云はは男に似し之を花とて之とて

本松の身 風ハ神をりの可かかれ之を
わらふ身と早下と云ふ

十三経の如し 十三経の如し

凡俗通曰等奉素色也或云蒙恬所造五絃築
色并凉二尺等形如瑟不知誰政也或云素多

善等者故云素等也上圓象天下方象地中空準
六合弦柱十二擬十二月長六尺象六律柱高三寸象

三才。○款名云等旒絃高等々然
まのゆさ 了らふと云ふ

本松の如し 本松の如し 本松の如し

まのゆさ 了らふと云ふ

まのゆさ 了らふと云ふ

あつみの事 ねむらむと云ふ

まのゆさ 了らふと云ふ

まのゆさ 了らふと云ふ

まのゆさ 了らふと云ふ

まのゆさ 了らふと云ふ

まのゆさ 了らふと云ふ

つゝあゝとて佛法りてしんくもさるるる方れ
いられしやうかふさうさうとさう
わくまうさう
佛法りてさうさう

くさうさうさう 和祕まうさうさう
或アリあゝん 石或アリさうさう
かゝまうさう さうさうさうさうさうさう

さうさうさうの生 儒者初学の時さうさう
さうさうさうのさうさう 了ぬの後さうさうのさう
さうさうのさうさう さうさうさうさうさうさう

さう二の道 白樂天秦中吟の全句へ貧家の女は富
家の如きの得失と誇りてさうさう家の如く嫁娶な
る事いさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

いさうさうさうさうさうさうさうさうさう
早輕其夫貧家女難嫁々晩孝於姑
いさうさうさう 道行かさうさうさうさう

さうさうさうさう さうさうさうさう
いさうさうのん 空能やうさう
さうさうさうさう さうさうさうさうさうさう

いさうさうさうさう 源双中よに幸車からさうさう
かゝさうさうさう 大方男子いさうさうさう

いさうさうさうさうさうさうさうさうさう
いさうさうさうさうさうさうさうさうさう

此知也

かまのうらみの 三つとひてうらむ

かまのうらむ

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

うらむとくは 不足くうらむとなく又

かまの神 中神 長神 天一神也 金縷經云天也

立中央鳥十二將定吉画 立中央之故号中神歟

件方古今所違来也見尚昏 曆 陰陽離昏也

或云初日夜有方違者次夜不可忌初日夜有方

違者次之夜件塞方不可忌也

家業抄又永久四年十二月二日 縫殿亮家業依法

性寺殿命余進之天一方向謂之長神 見河海

二條院 大内

二條東河院 大内

大内

中河

中河

中河

中河

中河

中河

中河

中河

中河

中川 京極川 西川 桂川 中川 京極川 西川 桂川

中川 京極川 西川 桂川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

ふじあきま 丁に記す

か中家より 田舎りたる

ふさの 帝たるありし 帝座たるのつと

わりのさか 武家のさかとかん子丁

わりのさか 武家のさかとかん子丁

こゆりのぬき 武家のさかとかん子丁

かろし 武家のさかとかん子丁

之名也 席 日本紀 延

ふりのさか 武家のさかとかん子丁

ふりのさか 武家のさかとかん子丁

ふりのさか 武家のさかとかん子丁

ふりのさか 武家のさかとかん子丁

ふりのさか 武家のさかとかん子丁

ふりのさか 武家のさかとかん子丁

ふりのさか 武家のさかとかん子丁

ふりのさか 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

ふりて記す 武家のさかとかん子丁

真入 松河云真入の親臣なり
政真人名親臣

あつて 此のトにふりこく
いふやうに 此のトにふりこく

かゝるやうに ときかたのめい

あつて 不意にわかれぬもの

井のよわい 別井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

あつて 井のよわい

いづれにせよ 上端下端のいりまきかき
をりしちねよいづれにせよいづれにせよ
源三郎と名かみね

いづれにせよ 源三郎の事か新いづれ
いづれにせよいづれにせよいづれにせよ
源三郎と名かみね

いづれにせよ 源三郎の事か新いづれ
いづれにせよいづれにせよいづれにせよ
源三郎と名かみね

いづれにせよ 源三郎の事か新いづれ
いづれにせよいづれにせよいづれにせよ
源三郎と名かみね

いづれにせよ 源三郎の事か新いづれ

いづれにせよ 源三郎の事か新いづれ

いづれにせよ 源三郎の事か新いづれ

いづれにせよ 源三郎の事か新いづれ

いづれにせよ 源三郎の事か新いづれ

いづれにせよ 源三郎の事か新いづれ

いづれにせよ 源三郎の事か新いづれ

いづれにせよ 源三郎の事か新いづれ

いづれにせよ 源三郎の事か新いづれ

いづれにせよ 源三郎の事か新いづれ

いづれにせよ 源三郎の事か新いづれ

うら子ののちて うねるんしえよのかきり初
一筆とふんしうむいふのふりしりれし
痛字し 利方後述く二巻のねのらまひ
志のし一いふれまはあわしりせり
こさてわらまん 引方られしるまふ事
まら若びいふりまらん人のうくまは
いふれまはあわしりせり
よらうりしと 源氏の初しは教実事ありし
こま後しりれしし 引方しりまはしり
いふれまはあわしりせり
まら若びいふりまらん人のうくまは
いふれまはあわしりせり

はむかしのあま 引方しりまはしり
うくまはあわしりせり
まら若びいふりまらん人のうくまは
いふれまはあわしりせり
よらうりしと 源氏の初しは教実事ありし
こま後しりれしし 引方しりまはしり
いふれまはあわしりせり
まら若びいふりまらん人のうくまは
いふれまはあわしりせり
よらうりしと 源氏の初しは教実事ありし
こま後しりれしし 引方しりまはしり
いふれまはあわしりせり
まら若びいふりまらん人のうくまは
いふれまはあわしりせり

引方しりまはしり
まら若びいふりまらん人のうくまは
いふれまはあわしりせり

